



talk! talk! talk! タレント・林 マヤさん



タレント 林 マヤさん

まわりの人にも元気を与えてくれるような、明るい笑顔が魅力の林マヤさん。トップモデルとして海外で数々のステージを踏んだ後、現在はタレントとしてテレビ、雑誌等で活躍中だ。常に「撮られる側」だったマヤさんが、今夢中になっているのが、デジタルカメラ。今回は、マヤさんにとってのデジタルカメラの魅力や、トップモデル時代の撮影エピソードまで幅広く語ってもらった。

プロフィール

はやし・まや。ファッションモデルとして日本でデビュー。パリでファッションカメラマンのピーター・リンドバーグ氏に認められ、日本人モデルとしては初めて、フランス版「マリークレーン」誌に出演。その後、クリスチャン・ディオールやジャン・ポール・ゴルティエなど、数々のファッションショーに出演。モデルとしてパリと東京両都市を拠点とした生活を数年続けたのち、現在は、「NHK週刊子どもニュース」や「TBSジャスト木曜日」に出演など、タレントとして活躍中。

自分なりの世界を創りだすことができるデジタルカメラ。すっかりはまっています！

いつごろからデジタルカメラを使い始めたのでしょうか？

本腰を入れ始めたのは、3年前くらいからですね。カメラマンのダーリンが使っていたおさりのデジタルカメラをもらったのがきっかけです。それまでは、ずっと撮られる側だったので、カメラ自体にそんなに興味はなかったんです。それが、デジタルカメラをちょっと使ってみたら、面白いな、と思い始めました。

どんなところが面白かったのでしょうか？

とにかく自分で撮った画像をすぐに見ることができるでしょ。それがまずすごく楽しかった。気に入らなかったら、すぐごみ箱にポイってできちゃうし。楽しいな、と思ってどんどん撮っていくうちに、自分なりの世界を創っていける気がして、すっかりはまってしまいました。

普段はどんなものを撮っていらっしゃいますか？

特別何とは決まっていなくても、町を歩くのが大好きなので、歩きながら撮るのが一番好きですね。その中で、絶対に撮りたい、と思うのが猫！！ノラ猫が大好きで、自分のホームページに「野良猫写真館」というのも出しています。もうノラ猫を見つけたらどこまでも追っかけていっちゃうんですよ（笑）。

かなりアップのノラ猫の写真も撮っていらっしゃいますが、近づくのは大変なのでは？

そう、そう！もう大変なの！野性味があって、自由奔放なノラ猫が相手なので、じっとしてくれないんですよ。だから、ノラ猫を見つけたら、まずそうーっと近づいて、話しかけるの。

えっ、話しかけるんですか？

そうなんです。わけのわからないネコ語をしゃべってるの、私（笑）！さわると逃げちゃうので、「ホニャ〜〇△×！！」とか言いながら近づいていくの。そうすると、向こうもこっちの様子をうかがってくるんです。それで、なるべく撮るときは姿勢を低くしています。やっぱり高い所からカメラを持てると、ネコが威圧感を感じるみたいで、すぐ逃げちゃったり、すごく怖い顔したりするんです。だから、なるべく地面にはいつくばって撮っています。デジタルカメラって、普通のカメラと違って「カシャッ！」という音がしないから、相手が構えなくてすむ良さがありますよね。だから私は、隠し撮りじゃないですけど（笑）、例えばレストランに行くと、「あ、このメニューいいな。」と思ったら、すぐ撮っちゃうんです。それで、家に帰ってから、「このメニューの名前いただき！」とか、「レシビ作っちゃお！」って、結構役立つんですよ（笑）。あと、どこに行っても、自分の足を必ず撮るんです。電車の中とかでもパチリって。



ネコがいる所なら、たとえ車の下でも追いかけるというマヤさん。ネコ語のおかげで（？）、ネコもリラックス。



自分の足もとをパチリ。どこに行っても必ず撮影するそうです。



へえ、いろんな楽しみ方があるんですね。デジタルカメラで撮影されるのは、お休みの日が多いのですか？

ええ、オフの日ですね。私、仕事の時に持って行くと、仕事じゃなくなっちゃうんです！もう撮ってる方が面白くなっちゃって、収録が始まる直前とかにもフラフラと写真撮りに行ってマネージャーさんを困せたりしちゃうので（笑）。一度撮り始めると夢中になっちゃうんです。ニコンのクールピクス995は、レンズが回るの、すごく面白いですよ！最初面白くてレンズをぐるぐる回してたんですよ、それでふっと見たら自分が映ってたんで、びっくりしちゃった（笑）！先週長野の実家に帰ったときに、父と二人で撮ったりもしました。自分たちの表情を見ながら撮れるって、とっても便利です。今まで自分を撮ろうとしても、ぶれたり、端がきれちゃったりして、なかなかうまく撮れなかったんです。記念撮影でも、人に「シャッター押してください」って頼まなくてすむので、これは最高ですね。

では、旅行に行かれるときなども持っていかれるのですか？

もちろん！デジタルカメラを持っていくと、思い出を切り取ってくれる感じがするので、必ず持っていきます。私、ポストカードを集めたりすることも大好きなんですけど、写真って、その風景や、その時自分が感じたことを切り取ってくれるポストカードみたいな、って思うんです。撮った写真を持って帰って、パソコンで見るの。そうすると、本当にまたその場にいるような気分になれるので、好きな音楽をかけながら思い出にひたってます。落ちこんだときにそうやって写真を見て過ごすこともありますね。



マヤさんの故郷、長野県にある太郎山。マヤさんの元気な笑顔はこの風景に囲まれて育ちました。



誰もいない公園のフェンスになぜかぼつんと掛けられていた三輪車。気がついたらシャッターを押していたそうです。

怖がらずに1歩踏み出すことで、人生が大きく変わりました

次に、モデル時代のお話を聞きたいと思います。最初は日本でデビューされたんですね？



はい。最初は日本でモデルを始めましたが、全然売れなかったんです。当時、私は刈り上げスタイルをしていて、男の子みたいだったんです。でもその時代はボブスタイルが流行っていて、女性らしいモデルさんが主流だったので、誰も認めてくれませんでした。オーディションに行っても、男の子だと思われて「今日は女の子のオーディションの日だから、明日来なさい」と言われたり。喫茶店のアルバイトなど、フリーターをしながら2~3年モデルをやっていたんですが、モデルとしてのプライドも全く持てず、自分の居場所も全然見つからなくて、かといってやりたい仕事も見つからず、というつらい日々でした。

そうだったんですか。それが、なぜ海外で活躍されるようになったのでしょうか？

とにかく自分の居場所を見つけたくて、どうしたらいいだろう？って考えました。それで、やっぱり私はファッションが好きだし、中でもパンクファッションが大好きだったので、パンクの世界を極めよう！と思いました。パンクといえばロンドンが本場ですよね。だから、とにかく日本を逃げ出す、という形で、アルバイトで貯めた30万円だけを持って、ロンドンに行く決心をしたんです。

モデルではなく、パンクの世界を目指して日本を飛びだしたんですか。

はい。お金がなかったので、パリに着いたらすぐにロンドンに行くつもりで、まずパリ経由の格安チケットを買いました。それが、計算違いで、パリで2日ほど時間をつぶすことになってしまったんです。せっかくだから観光でもしようかな、と思って、昔一緒に仕事をしたことのあるデザイナーの入江末男さんがパリにいらっしやっただので、電話をして、オシャレなカフェに連れていってもらいました。そのときに、入江さんの知り合いらしき男性が近づいてきて、入江さんとおしゃべりしていたんですね。私は「なんだ、このおじさんは？」なんて思いながら見てました。しばらくしたら入江さんが、「マヤ、ピーターがマヤの写真撮りたいって言うてるよ」と言うんです。

ピーターとはその男性のことですか？

はい、その男性は、なんと世界で5本の指に入るといわれる超有名なファッション・カメラマンのピーター・リンドバーグさんだったんですね！入江さんに、「ピーターがマヤの顔が面白いから、マリークレーン誌に載せたいって言うてるよ」と言われて、最初は「面白い顔なんて失礼だな！」なんて思ったんですが（笑）、私はそれまでブスだ、とか男の子みたい、とばかり言われていて、面白い、なんて言われたのは初めてだったので、悪い気はしなかったんです。それで、モデル生活の最後の思い出として、マリークレーン誌に載るのもいいかな、という軽い気持ちで引受けました。

そのときは「最後の思い出」のつもりだったのですか？

そうなんです。でも、次の日から始まった写真撮影は、本当に楽しくて、そこで私のモデル人生ががらりと変わったのです。

どのような撮影だったのでしょうか？

ピーターさんは、おしゃべりしながら撮るんです。「マヤ、一緒に歩こう！」って2人で歩きながら撮影が始まりました。彼は上から撮ったり、下から撮ったり、「マヤ、まわって」と言って、彼もまわりながら撮ったりして、まるで2人でダンスしているみたいな気分になって、本当に楽しかった。しかも彼は1日に1、2カットしか撮らないんです。終わったら皆でレストランでワインを飲みながら食事をして、次の日にまた1、2カットの撮影。それまでの日本での撮影経験だと、はい、次はあれを着て、これを着て、というふうな感じで、感情を入れている余裕はありませんでした。でも、このピーターさんの撮影で、私は「撮られる」ということに楽しみを見つけたんです。もう面白くてたまらなくなって、そのままロンドン行きはやめました。その写真の評判も非常によくて、パリ・コレクションに出ているデザイナーさんから、「面白い日本人がいるから使いたい」と、どんどん声がかかり、パリ・コレクションに出演できるようになったんです。

パンクの道を極めるはずが、別の道を極めることになったのですか？

はい。もうあきらめたつもりモデルの世界にまた入ることになりました。

そういった突然の環境の変化を、どのように感じていましたか？

もう、すっごくうれしかったです。日本を逃げ出してきたつもりだったけれど、一応、自分でお金を貯めて、一歩踏み出した結果ですね。だから、怖がらずに何かをやってみることって大事だな、と思いました。それをきっかけに、いろいろなことが怖くなくなったんです。同時に、それまで自分に自信が持てなかったのが、少しずつ自信が持てるようになりましたね。自分の嫌いだっところを、パリの人が誉めてくれたんです。たとえば、笑うと歯茎が出るのがすごくいやだったんですけど、「太陽みたいな笑顔だね」とか、「マヤってかわいね」と言われたんです。それで、今までは日本で気取った写真しか撮れなかったのに、自分も自然のままでもいいんだな、と思えるようになって、どんどん自分のことが好きになりました。

その後、モデルとして大活躍されるわけですが、ファッション・ショーなどでステージを歩くときはどんなお気持ちなんですか？

あれは、気持ちいいですよ！歩くときは、1枚の服に対して、自分でイメージを決めて歩いていきたね。たとえば、黄色い洋服だったら、「私はひまわりの精」というふうに分身なりにタイトルをつけるのが好きだったんです。そして、太陽の中でフワって広がっているようなイメージを思い浮かべて、ライトの当たる場所でフレアスカートが広がるようにくるくるまわってみたりしました。



のびのびとした屈託のない笑顔からも、マヤさんの心境の変化がうかがえる。



パリコレクション、ヨージ・ヤマモトのショーより。少年ぼさがマヤさんの魅力。



それは、誰に言われたのでもなく、ご自分のアイデアですか？

はい。私はモデルクラブにいたころ、劣等生だったんです。歩き方が下手だといつも怒られていました。それで、自分なりの歩き方や、ターンの仕方を研究するようになりましたね。私は171cmで、まわりのモデルさんはほとんど176cm以上だったので、本当に小さかったんですけど、無理しないで自分らしさを出してしまおう！と思って、いつも自分のアイデアを活かすように工夫していました。オーディションで、音楽をかけて歩け、と言われたときに、裸足になって踊ったこともあります。そうやって自分らしさを受け入れてもらえたときは、うれしかったですね。

マヤさんのオリジナリティーを活かしていたわけですね。

でも、最初はなかなかそれが認められなかったんですけどね。だから、パリに行って、パリ・コレに出るようになって、初めて日本でも認められるようになったんです。逆輸入みたいなかんじですよ。そうやって、モデルとして日本とパリと行ったり来たり生活を6年くらい続けていました。

パリコレクション、イッセイ・ミヤケのショーより。このポーズも、もちろんマヤさんのアドリブです。

デジタルカメラを使うことで、感性が豊かになっていく

現在は、テレビを中心にご活躍されているわけですが、普段、デジタルカメラに親しんでいらっしゃるのですが、役立ったりすることはありますか？

うーん、仕事で、というよりは、デジタルカメラを使うようになって、私自身の感性が変わってきたと思いますね。デジタルカメラで写真を撮るときってというのは、すごく一生懸命被写体を見るでしょう。だから、好奇心だとか、分析する目というのが肥えてきた気がしますね。以前は、お花をひとつ見るにしても、「これ、いいね。なんか、かわいいね」といった感じで、せいぜい色や形を見るくらいで、その場かぎりだったんです。でも、デジタルカメラを使い始めてからは、質感とかも感じるようになりました。ピロッドみたいな花びらだな、とか、花びらの筋の色が違うとか、前は気がつきもしなかったことに気がつくようになりましたね。ちょっと自分の目がミクロな感じになってきたのかな（笑）。

デジタルカメラを使うことによって、マヤさんの視野がかなり広がったんですね。

そうですね。以前は、デジタルカメラという響きは、すごく機械的な感じがしていたんですが、自分が使ってみてそうじゃない、ということがわかりました。音も優しいし、人にも優しいカメラだと思います。今は、仕事に集中するためにオフの日しか持ち歩かないようにしているけれど、もう少し余裕を持って仕事をこなせるようになったら、できれば肌身離さず持っていたいと思っています。これからもずっと、デジタルカメラと一緒に歩いていきたいですね。

カメラマンのご主人様から、いろいろアドバイスを受けてたりするんでしょうか？

そうですね、もううるさいんですよ（笑）！でも、最近は「結構うまくなってきたね」と誉められるようになりました。いろいろアドバイスされると、いろんな撮り方があるんだな、と勉強になりますね。それぞれが撮ってきた写真を夜、二人でああだ、こうだ、と言いながらお互いに発表しあうのが楽しいですよ。

それでは、今度は夫婦そろってご登場いただきたいですね。本日はどうもありがとうございました。



デジタルカメラを使い始めて、今までは気が付かなかっただけのいろいろなものが見えるようになったそう。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.